



あま市美和・甚目寺歴史民俗資料館だより

ニュースレター

平成 27 年 3 月

No.005

編集・発行

美和歴史民俗資料館

(生涯学習課 文化振興係)

〒490-1292

愛知県あま市花正七反地 1

電話 (052) 442-8522



甚目寺中学校 (昭和 24 年頃)

画像提供 小林守一氏

今回紹介する写真は、完成間もない甚目寺中学校（以下甚中）の木造校舎。そもそも現在の中学校は、昭和 22 年の学校教育法に基づき 6・3 制が施行されて誕生したもので、当時どこの市町村もその校舎建設が急務となった。校舎が無い中学校の多くは、それまでの国民学校の校舎を小学校と共有するなど、その場をしのぐことに。甚中も開校から 1 年半ほど甚目寺小で授業を行っていたという。写真にある校舎の完成は昭和 24 年以降、真新しい校舎とは対照的にグラウンドはデコボコ、雨が降ると池のようであったと、当時の在校生は回想する。この時代、学校校舎の完成は戦後復興の象徴のひとつ、日本の未来を担う若者たちへの期待を胸に混乱する時期にありながらも建設された。甚中の木造校舎は町（甚目寺町）の人口が急増する 50 年代初めに取り壊され今は見る影もない。

ちなみにこの周辺一帯は戦中、陸軍飛行場の敷地で、写真の左奥に半分だけ映る重機は、その遺物として長く校庭の片隅にあったという。

(提供者及び小林勉氏より聞き取り：6 ページに追加記事あり)

* 資料館では昭和 40 年以降の市内で撮られた写真の収集をはじめました。何卒ご協力のほどを！

平成 26 年度 事業報告

〈1〉文化財に関すること

県天然記念物 下萱津フジ 一般公開

およそ 10 年振りの一般公開とあって、2 日間で 686 名もの見学者を得た。

「間取り花鳥文大花瓶」を市指定有形文化財に

市となって 3 件目の文化財指定。七宝焼アートヴィレッジの常設展示室でひととき存在感を持つ同作を文化財に指定した。

西尾張オコワ祭調査委員会による祭調査

2 年目となる調査活動が当市七宝町下之森および愛西市勝幡の両地区で実施された。

〈2〉企画展示会

期間	展示会名
2/28～5/16	新収蔵品展
6/1～6/30	第 24 回 ときのきねんび展
7/18～9/21	夏の掛け軸 ～床の間にある夏～
11/1～12/7	秋の企画展示会 語り継ぎたい郷土の偉人展
3/17～	春の掛け軸（仮）

〈3〉歴史散策事業 アルケミスト

実施日	内容
4/19	福島正則を偲ぶ散策会
4/26、27	下萱津フジ見学とその周辺散策
6/14	遠島の着倒れ、篠田の食い倒れ
11/9	郷土の偉人を訪ねて
11/22	*飛島村散策（あまてらす）

*飛島村散策は海部歴史研究会の主催する散策事業に協力した。

〈4〉水文化継承事業 エコきッズ調査隊

実施日	内容
7/20	田んぼの学校
7/28	木曽川の生き物調査（悪天候中止）
8/5	地元河川の水質調査
8/22	まとめ&エコきッズサミット

対象は市内の小学生。本事業は宮田用土地改良区、国土交通省木曽川下流事務所の協力により実施した。

〈5〉講演会事業

実施日	演題	講師
11/30	あま市と北米移民について	筒井 正氏
1/25	あまとやま その 1	若山 聡氏
2/1	あまとやま その 2	同上
3/1	*海部歴史講演会 海部地域のくらしと環境	木村妙子氏 蔭山誠一氏
3/14	古文書解読のコツ	藤井智鶴氏
3/15	鎌倉街道について	河合幸男氏

*海部歴史研究会の主催する講演会事業に協力した。蟹江町産業会館で開催された。

〈6〉文化体験講座事業 トイナオス

実施日	回数	講座名	講師
6～2月	9	古文書解読講座	藤井智鶴氏
10～11月	4	坐禅に学ぶ	山田泰信氏
12月20日	1	しめ縄教室	竹田武夫氏

〈7〉検定事業（主催は実行委員会）

ジュニア検定（小学 6 年生児童対象）

市内の全小学校校で実施した。対象となる 6 年生児童に出前授業（12 月～1 月）を行い、2 月初旬に各校で検定を実施した。

（出前授業の様子→）



ものしり検定（中学生以上）

申し込みは 40 名。受検者 33 名。今年度は初級編のみを実施、四択 50 問に加え、四択 100 問コースを新たに設けた。申込者の 7 割が 100 問コースに挑戦する。合格率は 59 パーセントと例年よりやや低めであった。

ものしりジュニア選手権

ジュニア検定で学んだ知識を発揮する場としてクイズ選手権を 2 月 22 日に実施。詳しくは 6 ページの資料館ニュースを。

〈8〉学習支援活動

移動博物館、出前歴史授業（検定以外）

収蔵品の中より当地域に関わり深い昔の生活道具を 8～12 点ほど学校へ持参し、3 年生児童を対象に授業（1 時限）を実施した。甚目寺南小、甚目寺小、蟹江中学校の要望に応じ歴史授業を実施した。

42分の蜂須賀 知って得するあまのツボ！ (2)

「42 分の蜂須賀」。まずは「42」とは何か、合併前の大字（今でいう地区）の数で、江戸時代までは、そのひとつひとつが村として機能していました。各村には独自の歴史が積み重なり、それぞれの文化を形成していたと考えれば、あま市は「42」もの多様な歴史が集まった「まち」ということになります。

そこで当館では「42分の〇〇」と題し、地域の歴史文化を継続して発信する予定です。知られざる横顔を通し、その面白さを認識、再認識下さい。

第2回目は、あま市でも最も西に位置する「蜂須賀」です。この地区に人が住み始めたのは弥生時代と思われ、地区内には弥生～古墳時代の遺跡が各所に点在、古刹蓮華寺をはじめ史跡も多く安土桃山時代の武将である蜂須賀小六正勝を輩出するなど、特筆すべきことは、たくさんあ



りますが、今回はこれまであまり語られることのなかった「蜂須賀」にスポットをあてます。

① 尾州海東郡蜂須賀村由来記という本

蜂須賀地区を語る上で外すことのできない書物に『蜂須賀村由来記』がある。同地区の旧家に伝わっており、

同書の最後に「寛政6年(1794)申二月うつし置き」と江戸時代に書き写された墨書が残る。ただ原本の存在は分かっておらず、また作者も不明である。内容は「いにしえより古記録にまかせ、これまで伝えたることのみ書き記す。末世の人々、この書を読みて当所の誤合いを心得るべき…」とあり、地域の由来、言い伝えを書き写したものとわかる。ここでは当地の地名に関すること、蜂須賀家の記述部分のみ抜粋し紹介する。

A) 地名「蜂須賀」の由緒

弘法大師(空海)がこの地を訪ねると蜂蟻に頭を悩ませる村人に出会う、それを不憫に思った大師は、加持をもって蜂蟻の塚を築き、悪い虫を封じ込めた。ゆえにこの地が蜂塚と呼ばれ、いつしか蜂須賀になったとある。大師に関わる霊地なれば人軒をならべ大いに繁盛した。

B) 地名「菅安」と老人

地名「菅安」は白山妙理大権現の御宮地で弘法大師がこの地を訪ねたさい、ここには人家も無く飄々たる野原なれば一夜の宿りも無く困っていた。そこへ白髪(せん)の老人が来て大師に「先だってよりあなたが来るのを待っていました。ここは並びなき霊地(しゅうじょうゆうえん)で衆生有縁の土地なれば、ここに一字を建て仏法(たま)を広め給うべし…」、大師は喜び一字を建立した。これが蓮華寺なり。されば白山の御宮は蓮華寺の戌亥(北西)にあたり「菅安」と申し、今にいたる。

C) 正勝の舎弟

正勝の弟である平左衛門勝秀は、虚

弱病身にして阿州（徳島）へ移住できず、やむを得ずこの地にとどまり、正勝の古殿屋敷に住居いたし、阿州より扶持をもらい安楽に暮らす。病氣も快方し長命を保ち慶安 4 年（1651）に亡くなる。

D) 正勝と地蔵

いにしえここに（蓮華寺の東側）延命地蔵菩薩があった。開運地蔵といわれ、靈驗あらかた貴賤男女を問わず参詣の群集で市をなせり。蜂須賀正勝もこの地蔵を夜毎参詣し、一国の主となるべき願いをかけ、見事に成就。後世、この地蔵の錫杖（しやくじょう）を槍先の印（しるし）とし、御道中には必ず阿波守様（藩主）の乗り物の前を歩いた。この地蔵はその後中橋の法蔵寺へ安置され奉られる。

今の私たちが伝え聞く話と異なっているが、あくまでも江戸時代の当地域に伝承された話として紹介した。ちなみに同書は冊子化され当館にて頒布中（500 円）である。

② 人物 芙蓉良順（ふようりょうじゅん）

今後伝え残すべき偉人としては宗教家であり教育者（文学博士）の芙蓉氏を紹介したい。氏は明治 33 年（1900）友松義順の二男として蜂須賀に生まれる。家は真宗高田派の西光寺。愛知県立第三中学を卒業後、真言宗智山派留学生として真言学専攻として高野山大学に入学。優秀な成績で卒業し、同宗立観学院の助教授として教鞭（きょうべん）をふるった。昭和 4 年（1929）養子に行き芙蓉を姓とする。智山専門学校教授を経て大正大学へ。同大の第 19 代学長をつとめ、後に真言宗智山派智積院の 62 世管主となる。同 58 年（1983）83 歳にて永眠す。

③ 蜂須賀の風習 嫁入り

嫁入りの際の菓子撒きは今もなお各地で行われるが、その一方で地蔵担ぎは姿を消した風習である。しかし当地区は平成になるまで、その地蔵担ぎを行っていた。これは婚礼当夜、若い衆（消防団）が祝意の表現として村にある辻地蔵を婚家に持ち込む。持ち込

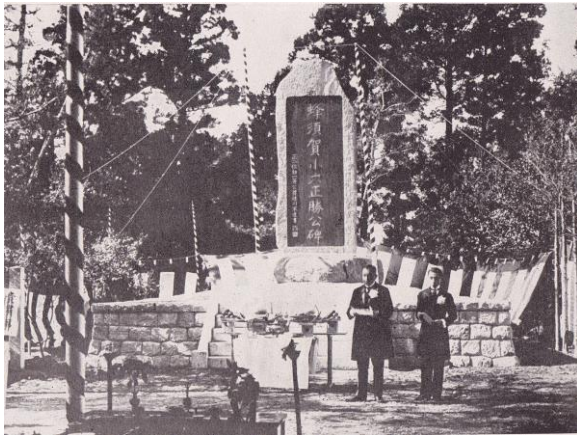


まれた地蔵は、縁側に並べボタ餅をお供えし、婚家で一夜を明かした。こうした風習のせいかな当地区の辻地蔵はいずれも首などが折れ、修復の跡が残る痛々しいもの。さらに持ち込まれるのは地蔵のみならず、焼場（地区の火葬場）のガン台（棺桶をのせる台）、分解した大八車を屋根上で組み立てて飾ったりと、およそ地区内にあるもので持ち運び可能なものは屋敷周辺に集められた。娯楽の少ないかつての若い衆の楽しみが、近年まで色濃く残る地域であった。ちなみに持ち込まれたものは、翌日婚家の人たちが村中を歩いて、手土産を持参のうえ返却した。

④ 蜂須賀の史跡など

A) 蜂須賀小六正勝公顕彰会

蓮華寺の山門手前にある巨大な同公顕彰碑、現在もその命日である 5



月 22 日には、碑前にて同公の法要が執り行われる。この碑は昭和 2 年（1947）に建立、除幕式当日は蜂須賀茂韶・正氏父子の臨席（↑画像）のもと盛大に執り行われた様子が伝わっている。ときの内閣総理大臣からも祝電が寄せられるなど、多数の名士が来村したとも。そして何よりこの碑の建立とともに、地元が中心となって「蜂須賀正勝史跡保存会」が発足、いまも顕彰碑の右斜め前にその証である石碑が建つ。保存会総裁には当時の愛知県知事で顕彰碑文（顕彰碑裏面）を読んだ小幡豊治が担当した。この時代、小六といえはまだまだ「夜盗」というイメージが拭いきれなかったが、同公をわが村の偉人として顕彰する思いを持ち続けた地域の熱意は相当なものであった。しかし太平洋戦争の激化により会は自然消滅し、昭和 46 年（1971）再びその顕彰機運が高まり、地元の強い熱望により「正勝公顕彰会」が発足され今に至る。

B) 上街道沿いに建つ蓮華寺の大灯籠

名鉄津島線と並行して市の東西を走る津島上街道沿いに池鈴山蓮華寺を示す石柱と大きな灯籠一対がある。灯籠の間を通り抜け北へ向かえば蓮

↓現在の大門。石柱の後ろに大灯籠がある。奥の建物は蓮華寺の参拝者にお茶をふるまったお茶所である。



華寺の山門につながる道で、大門通りと呼ばれていたらしい。江戸時代、同寺より代官所に宛て、この道を切り広げて欲しいという要求が出され、それにより道幅が 2 間となった記録が残る。またこの大灯籠は「名古屋松虫講中」という現在の名古屋市東区の講組が奉納したもの。かつて弘法大師が熱田神宮より蜂須賀へ向かう道中、同地区（講組のあった地区）の人々が大師を丁重にもてなした。それゆえ大師は、お礼に火防守護の加持をして去った。以来、火事で町が全燃することは無く、いつの頃からか大師に縁深い同寺に帰依したという。（『歴史を語る会』会報 33』より）

C) 源佐橋

愛西市佐折、同村の庄屋で植田源佐衛門が私財を投じ津島上街道の目比川に土橋を掛け、ゆえに源佐橋と付いた。橋のすぐ西側、街道の南に今も植田家（喫茶店）はあって、その敷地内、街道に面し 1 本の石柱（画像→）が建つ。これは三宅（稲沢市平和）の長福寺への道標で、ここから北西へ大塚井筋の堤防沿いに行けば勝幡を通らずとも三宅に行ける道があるというもの。（片桐欣也氏調べ）



←かつては同井筋の堤防上にあった道標。



■あま市の歴史クイズ選手権 開催！

平成 27 年 2 月 22 日あま市ものしり検定実行委員会（当館事務局）および西尾張シーエーティーヴィの主催による「あま市ものしりジュニア選手権」が開催されました。

実はこれに先立つこと 2 か月前の 12 月より市内全校（全 6 年生）へ出前授業を行い、その後、各校ごとにジュニア検定を実施いただきました。こうして得た郷土史の知識をさらに発揮できる場として「ジュニア選手権」が開催されたのです。その記念すべき第 1 回目は市内 10 校より 30 組（三人一組で申込）、90 名もの児童が参加し、あま市の歴史クイズ王を目指し、まさに熱戦を繰り広げることになりました。3 人一組で難問をクリア、仲間とともに協力し見事優勝を果たしたのは篠田小学校のチームでした。

なお市観光協会、佐藤醸造株式会社といった地元企業による協力など多くの個人と関係各位の協力により本事業は

盛況裡に閉幕しました。

■あま市ものしり検定

26 年度合格者は以下の通りです。

永田さき子、古橋雅勝、鈴木ゆかり、白井正俊、加藤仲子、松永博之、近藤紀久、松田義美、小島克彦、信岡彦弘、藤田昌平、松井 誠、寺島利治、林 登子、加藤 豊、村田 保、中ノ瀬君子、大角佳生、横井孝彦（敬称略）おめでとうございます。

表紙の続き

■甚中に関すること 追加

甚中敷地 1 万 7 千坪に教育的遊園地を…、昭和 24 年 8 月 22 日付の地方新聞「中部日本公論」の見出しである。当時の服部甚目寺町長は、中学校の第 2 期増築計画において、周辺地に教育遊園地を建設し県内外の小中学校が訪れる観光スポットの構想を秘かに立案中である。また最近、竣功の新制中学の敷地は日本一の宏大な土地で（中略）…、これが実現すれば大甚目寺町となるわけである。と締めくくられていた。この計画は構想に終わるが、思いもよらぬ計画があったことに驚かされた。

記事は津島市立図書館発行の「地方新聞集成海部・津島 第三輯」にて発見、同書には当時の中学校舎建設を巡る他市町村の情勢が偲ばれる記事もあり大変興味深いものである。

甚目寺歴史民俗資料館

開館時間 9：00～12：00、13：00～16：00
休館日 水曜日、木曜日
入場料 無料
交通 名鉄甚目寺駅より南に徒歩 5 分
駐車場 10 台
電話 (052) 443-0145
住所 あま市甚目寺東大門 8（甚目寺会館 3 階）

美和歴史民俗資料館

開館時間 9：00～16：00
休館日 水曜日、木曜日（6 月は木曜のみ）
入場料 無料
交通 名鉄木田駅より北に徒歩 10 分
駐車場 20 台
電話 (052) 442-8522
FAX (052) 445-5735
住所 あま市花正七反地 1

E-mail bunkashinko@city.ama.lg.jp